

# Provocations and Perceptions in Cranio-Facial Orthopedics

## 序 文

あらゆる歯科臨床の分野で、顎関節と咬合のテーマについては議論が絶えることはありませんでした。しかし今日においても、依然として、議論の根幹すら判然としていません。思えばこれは謎めく混乱です。

尤も、歯科教育そのものの在り方に、その要因が求められなくもありません。

と申しますのも、歯科医師を養成する標準的な教育は、卒後の早急なる実践上の要請に促され、機械論と技術の習得に偏るからです。

もう一点は歯科学生が培うべき「常識」は、単に垂直思考の延長線上の産物、すなわち各専門分野の知識が、実はそれぞれ異なる階層構造の上に成立していることに気づかず、「臨床」という複雑系の事象に立ち向かえる、との前提に沿って構築されていることです。

その種の教育様式は、たしかに、ある特定の状況下において、最低限の機能を果たすのも事実です。したがって知識の形成には無益とは言いきれません。

ところが、ここには大きな問題が伏在しています。

たかだか機械論的な臨床技法の枝葉末節に長じた程度で、しかも限局した「常識」に拘束され、支配され続けている状態に慣れてしまうと、

知らず識らず人は、歴年とともに広げるべき知性の芽をみずから摘み取ってしまい兼ねないからです。

知性の広がりとは、我々がめまぐるしく直面してゆく諸種の閉塞した社会事象に対する、新たな革新と挑戦の大いなる源泉です。臨床においては、それは鋭敏な明察であり、実践力の礎となります。専門教育がその芽を摘み取るとしたら、それはまことに悲しむべき出来事です。

やがて、臨床者の善意とは裏腹に、機械論に偏る中に身を置く結果、このようなことが起こるでしょう。それは、専門教育に没入するほどに矯正歯科臨床者は、個々人で幅広く異なる患者に対して、生体とはかけ離れた単純な物理則を背景とする治療術式を当て嵌めてしまいます。疑いをみずから問う姿勢もいつしか萎え、複雑な自然界の事象に対する解釈を、平面的な機械論で割り切る恐れすらあります。

解決の方途がないわけではありません。まことに有用な方途が遺されていることに、我々は目を向けるべきでしょう。

それは生物学上の原理原則を、臨床学に採択されている物理学の理論と生体機構論に重ねてみることによって、我々の臨床を再度検討し、謙虚にそれらの術式に生理性が担保されているかどうかを振り返る、いわば洞察的な試みです。

そのようなわけで、生物学と生体応用機構学の双方に関する知識は、咬合の生理というものが、実際の生体の中ではどうはたらいているかを把握するためには必要不可欠といえましょう。

付言するなら、咬合にまつわる論拠のすべては、歯牙に限局するものではなく、顎という複合体の全体、頭頸部の動きをつかさどる筋肉の連帯運動系 (kinetic chain) も含むものでなければなりません。しかも咬

合という生体の機能は、全身のキネジオロジーに影響を受け、それらが患者の心理にも影響される事実を踏まえれば、そこまで領域を広げて捉えるのが、自然なアプローチであることもお分かりいただけるでしょう。

『第1巻』は、頭蓋、顎、咬合にまつわる論争の整理に主眼を置き、ヒト科の動物の咬合というものを、ひろく進化上の変遷からも検討を加えてみました。『第1巻』は3冊（「Book One」, 「Book Two」, 「Book Three」）、合わせて9章で構成されています。

「Book One」では、歯や TMJ の臨床診断や治療指針の応用に関連した、各種の基礎科学、意味論の整理、種々の生物学を扱いました。

「Book Two」では、視点をより臨床に近づけ、不正咬合の成立に関わる機能因子、その成長変化の様相、顎関節の病理を解説しました。

「Book Three」では、臨床問題に対する直接的なアプローチの在り方を、咬合の問題や顎関節の失調をもつ患者へのマネジメントの観点から取り扱いました。

論点を総合的に、かつ具体的内容に沿って述べる場合、上記とは別の表現法を借りてみるのも多少の便宜があるかと思われれます。

それは、医療の基礎学として我々が習ってきた「解剖学」、「生物学」、「病理学」を基軸に、臨床上の問題の解決を図る方法です。

ところがこれは、ともすれば学生や臨床者にその重要性が看過される結果、学問自体までも忌諱される傾向すらしばしば見受けられます。致し方ないかも知れません。

その理由として、まず、臨床医の眼には、目前の臨床実践と、それに直結すべき基礎生物学の応用との関連が、甚だ不鮮明に写るからです。

一方、歯学部 of 学生諸氏にとっては、臨床自体がいかなるものである

かが、教養課程にあっては雲をつかむような話でわからない、という矛盾です。人というのは、かかる準備が、素地的にも経験的にも整えられてこそ複雑系の事象をわかることができます。

両者が乖離した状況で、臨床と教育が行われているのも、甚だ納得がいきませんが、それが実情です。

そのような背景に配慮して、我々は、基礎科学と臨床との関連を、多少なりとも明確化するように努めた次第です。しかもこのことは、思うに、「どこかに究極の術式があるはしないか」と虚しく人生の時間を空転させながら彷徨う臨床者を、臨床本来の道筋に呼び戻すための唯一の方法となると期待されるからです。方途とはなりえなくとも、気づきを促す意味においては、有用ではないでしょうか。

「咬合」とは、歯科臨床の全容を含めた概念の謂いです。咬合を知る上で、顎関節と下顎は欠くことのできない要素です。基礎科学に力を得ることによって両者を知悉することは、咬合にまつわる臨床問題の解決の便宜となります。

形質人類学を含めた進化論、発生学、神経学、解剖学、生理学に関する理論に精通していることも、「生理とは何か?」、「異常バランスにある形態とは何か?」といった、ともすれば上滑りの解釈で済ませてしまいがちな我々の思考を顧みるのに貢献するばかりか、さらには臨床における状況判断を、適確かつ鮮明化する上で有益なものです。

したがって、著者自身の経過に照らしてみても、これらの学問は、咬合に問題をもつ患者に対して、なんらかの治療計画を立案する上で、きわめて有効であるとの所感を抱いております。

古生物学、系統発生学、動物行動学も、個々の臨床者が培うべき自然界の法則に関する概念を精錬してゆく上で、存分に活用すべき分野であ

ります。

ところで、「知性」とよぶべきものが構築され、醸成されるには、基礎科学と生物学をベースとした「目的論的思考の活用」が欠かせません。

しかも、目的論的思考を自在に駆使できることは、とりもなおさず臨床者なら誰しものが備え持つべき基礎的アプローチ法です。医療者には資質としても求められているのです。

実践的な知識に裏打ちされた知性と目的論的思考の双方が呼応するかたちで、我々の理解は深まっていきます。ときには想像力をふくらませ、現実を踏まえた推論を躍進させ、そして揺るぎのない確証を心の中に刻ませてくれるのにも役立ちます。

これを基盤として、種々の与件に応じ得るばかりか、自然経過や治療介入時の変化を予測することが可能となります。しかも、このような過程を積み重ねているうちに、臨床者の心の中には次のような変化が培われていきます。それは、関連する事象や生体の応答反応をつぶさに見抜き、それらを観察することで、従来よりも、はるかに先の見通しが立つようになることです。予知性能力が高まらなければ、いつまで経っても俗に言う「藪」です。

見通しが立ち、眼幅が利くとは、物事を俯瞰する能力の向上であります。これは内にある種の「安心感（得心）」を我々にもたらしてくれます。

人類の思考というのは、地域、時代、民族でも違いがあるため多様性に富みます。しかし一方、単一生物種として「ヒト」をながめた場合、物事に取り組む態度、つまり意識無意識の働かせ方には、世界で共通の筋道があることも事実と思われれます。

たとえば目の前の患者に対して治療を計画し、それを実行に移す場合、そこには概ねの方向性として、臨床者が判断の基準として採用するに当たり、差し障りのない指標というものがあります。

勿論すべての疾病の状況に対して、それが適用されるわけではありませんが、通常は我々が依拠しても構わない判断の基準、すなわち「原理」とよばれる内容があります。そのことが了納され、応用が身につくにしたがい、秩序が損なわれた状況にどう対応すればよいか、計画を練ることが可能となります。

つぎに問題となるのが、例外事象をどのように取り扱うかです。

つつまずに申し上げるのなら、世の中に、「型にはまった術式」や「料理本ごときのテクニック」が存在するわけなどありません。それは単なる妄想に過ぎません。生命体の多様な履歴と遺伝特性、現在の環境的要因や心理に照らしても、このことは自明であります。

妄想にすぎる間は、臨床の場で「火傷」を負うか、その反動としてある種の状況に関しては全面否定なる「教条主義」の態度に打って出るのが常です。

しかし、そのような世相の多くの姿とは関わりなく、我々が参照すべき「生物学原理」が、厳として存在することを忘れてはなりません。

「咬合」……そこには多岐にわたる概念が包蔵されていた筈です。当初は天然歯が噛み合い機能するすがたを捉えていた概念でした。ところが歯学部 of 学生は、歯科補綴学で義歯の人工歯の配列を学ぶのを機に、生体のもつ「咬合」から逸脱した概念を、頭に植え付けていきます。

規定された咬頭の高径、文言通りに定まった噛み方、剛体で構成される咬合器、パターン決めされた運動経路……それらは、環境に応じて変化止まない弾性体である生体からは、まことにかけ離れた固着概念として、ますます頭の中を染め上げていきます。

一方で、多くの歯科医師は長年にわたって様々な経験を重ねる内に、「キチキチの機械論では割り切ることのできない、もっと有用な考え方」

というものの存在を認めざるを得なくなります。

歯列を取り巻く軟組織の環境変化にも目を向けるようになります。硬組織であっても経年変化が生じることを実地で学ぶでしょう。金属は劣化し、また磨り減り、電氣的にも浸食を受けるからです。軟組織が萎縮性に、ときには増殖性に变化する現象にも出会います。硬組織が腐食されることにも気づき始めます。やがて歯牙は喪失され、嚥下咀嚼発声といった機能が呼応して変わり、終局的には病理的な疾病に陥るといった、一連の生体変化を目にします。

ところで、歯科臨床学を体系づけてしっかりと学ぶ上で、4種類に大別されるグループに理論分けして物事を捉えてみるのが、臨床者にとってひとつの便宜となりましょう。すなわち、咬合学と治療学を4部門に分け、それらを援用し、現状の混乱を解消する方法です。

具体的には、当面の課題として、治療様式の適用を見誤ることなく、またそれらが順当に遂行できることを目的に「社会学」、「生物学」、「臨床学」、「メカニカルな治療実践学」を活用することです。

本書では咬合にまつわる著者の一連の研究が記載されています。臨床に並行して研究を推し進めていった起爆的な刺激の由来をたずねてみますと、Edward H. Angle の数々の著作と、彼の遺した教授法にたどり着くと思われれます。加えて1947年から1952年、イリノイ大学における Dr. Allan G. Brodie と Dr. William Downs の許で経験した臨床と研究が、内から著者を突き動かしていることにも気付かされます。

その刺激はさらに、アイオワ州立大学整形外科学主任教授であった Dr. Arthur Steindler との研究によって勢いづけられたと思われれます。1950年の夏、著者は彼の医局で、医学部で扱われている考え方と歯学部における見解の一致不一致を検討するという共同研究の機会に恵まれました。

著者の研究は、Dr. Hans Selye の助力を得る形でさらに鼓舞されました。セリエ氏は the distress phenomenon の著明な創始者です。

ナソロジーやリハビリブな歯科治療に携わる多くの仲間、顎顔面の形成外科の同僚、言語病理学の専門医、そのほかヘルスケアに関わる多くの医療従事者らが、惜しみなく協力してくれたおかげで、著者は研究に邁進する事が出来ました。オーストラリアのメルボルン大学矯正歯科学主任教授の Dr. Victor West もその恩人の一人です。

終わりに、形態と機能に関する著者の研究は、咬合にまつわる問題を抱えた幾千名もの患者の実際の治験経験と相まって、本書に掲げた数々の発見、そしてそれが契機となって展開された諸種の仮説、そして臨床理論を生むに至りました。

見解の相違と学説の論争というものは、もとより過去からありましたし、将来も変わりなくつづきます。ともあれ、新たな学説が唱えられ、それがその時代の医療に定着し生き存えるかは、少なくとも次の過程を経なくてはなりません。

第1の段階は、滑稽味をもった上辺の寛容。第2の段階は、敵意をもった攻撃。第3の段階は、熾烈な嘲笑。そして最後の段階が、一般的な認容です。

新たな学説は、3世代目の臨床者の時代に移り変わって、ようやく日の目を見る事が出来ます。第3世代の人々のみが、それを抵抗なく受け入れ、率直に謝意を表明するとともに臨床に活用するからです。これには、社会および経済、あるいは時代の「思潮」なる要素も複雑に絡みます。

先哲の業績と歴史的な蓄積を経た思想であっても、それが旧態依然の中に留まる者の目に「斬新」と映れば、直情的な反応を煽り立てること

になりましょう。あからさまな敵愾心で攻撃の標的とされた事例は、歴史を振り返ってみますと、枚挙には暇がありません。

もとより臨床の世界では、新たな変動が生じた場合、純粹研究と基礎研究の見地から、その基盤となっている臨床理論を、再度厳しく検討し、基礎科学の分野で大いに論議するのが望ましいことは、わざわざ申し上げるまでもありません。

そのようにして、科学的にも有効性が実証された理論や学説は、ひろく認証されてしかるべきです。

他方、他者の言を鵜呑みにし、あるいは患者一例の成功に思い込みを強めてしまい、そこで採択されている治療論を帰納論的に擁護する態度は、臨床者としてまことに稚拙であります。

慎重なる討議と考慮の結果、「確証を得たり」と判断され、周囲の状況を勘案して注意深く臨床へ適用されるのが、本来の医療の進歩の在り方です。

先述の内容を、著者自身も肝に留めた上で、「Book One」では、基礎科学の視点から臨床をあらためて見直す一助となることを願い、さらに基礎研究で明らかとなった所見を、日々の臨床活動に関連付けができるよう、非才を顧みず筆を進めた次第です。